

5. 爬虫類

日本の爬虫類としては、カメ目が4科12種（うち2種が日本固有）、トカゲ目のトカゲ亜目が5科33種（うち18種が日本固有）、ヘビ亜目が5科43種（うち21種が日本固有）の合計88種が知られており、福岡県には次の16種が分布している。

カメ目	ヌマガメ科	ニホンイシガメ、クサガメ、ミシシッピーアカミミガメ
	スッポン科	ニホンスッポン
	ウミガメ科	アカウミガメ
トカゲ目（有鱗目）		
	ヤモリ科	ニホンヤモリ
	カナヘビ科	ニホンカナヘビ
	スキנק科	ニホントカゲ
	ナミヘビ科	タカチホヘビ、アオダイショウ、シマヘビ、ジムグリ、シロマダラ、ヒバカリ、ヤマカガシ
	クサリヘビ科	ニホンマムシ

カテゴリーと選定基準

絶滅危惧種のカテゴリーは、環境庁（1997）の新カテゴリーに準拠した。過去の福岡県内での爬虫類の分布データはあまりにも少なく断片的で、今回のカテゴリー判定のデータとしては不十分である。その原因としては、一般に爬虫類が発見される頻度に比べて馴染みの薄いグループであること、とりわけヘビ類は研究者の数も少ないことが挙げられる。そこで、今回の判定の基礎は、1996年～1999年にかけてほぼ県内全域で全種を対象とした現地調査による。その結果は次表に示すとおりである（メッシュは環境庁の3次メッシュ、+は減少や悪化を示す）。

種	今回確認したメッシュ数	分布域、個体数の減少傾向	生活場所悪化状況
ニホンイシガメ	4	+	+
クサガメ	13	-	-
ミシシッピーアカミミガメ	5	-	-
ニホンスッポン	0	?	-
アカウミガメ	5	-	+
ニホンヤモリ	7	-	-
ニホンカナヘビ	88	-	-
ニホントカゲ	51	-	-
タカチホヘビ	1	+	-
アオダイショウ	30	-	-
シマヘビ	80	-	-
ジムグリ	8	+	-
シロマダラ	8	-	-
ヒバカリ	9	-	-
ヤマカガシ	64	-	-
ニホンマムシ	17	-	-

生息の確認は路上死体を含む成体，幼体の目撃によって行い，ヘビ類では種の同定が可能な脱皮殻も記録に含めた。過去の文献および標本資料も補足資料として活用した。聞き取りによる調査は，種の同定にかなりの不確実性を伴うため，原則として採用していない。種によって活動時間や行動習性が異なるため，ある種は人目につきやすく別の種は目に触れにくい。これらを総合的に判断して福岡県の絶滅危惧種を以下のとおり選定した。

絶滅危惧ⅠB類：アカウミガメ

絶滅危惧Ⅱ類：タカチホヘビ

準絶滅危惧：ニホンイシガメ，ニホンスッポン，ジムグリ，シロマダラ

重要なハビタット

福岡県に分布する爬虫類のおもなハビタットを次表に示す。

ハビタット	生息種
人家付近	ニホンヤモリ，ニホントカゲ，アオダイショウ，シロマダラ
耕地	ジムグリ，アオダイショウ
水田，河川，池	ヤマカガシ，ヒバカリ，シマヘビ，ニホンマムシ，淡水産カメ類
草地	ニホンカナヘビ，シマヘビ
林内	ニホントカゲ，ジムグリ，タカチホヘビ，ニホンマムシ
砂浜	アカウミガメ（産卵）

ヘビ類のハビタットは食性と密接に関係している。ネズミ類を主食とするアオダイショウは人家や耕地に多いし，カエルを主食とするヤマカガシやヒバカリは水辺によく見られる。シロマダラは小型のヘビ類やトカゲ類を食べるヘビで，人家近くでよく見かける。絶滅危惧種に指定したヘビ類はどれも狭食性のヘビで，ジムグリを除いてほぼ夜行性でもある。環境破壊により餌となる生物が減少すると，それが個体数の増減に大きく関わってくる。また，ジムグリは半地中性のヘビであるため，造成工事による影響を受ける。

淡水産カメ類では水質悪化が個体数の減少につながる。ニホンイシガメは比較的きれいな河川で見られていたが，最近ではめっきり個体数が少なくなったようで，河川の護岸工事やペットとしての乱獲が影響していると考えられる。日本在来のカメにとっては，本来外国種であるミシシッピーアカミミガメ（緑亀として販売されている）との競合も大きく影響している可能性が高い。

アカウミガメは砂浜に産卵するため，福岡県内では日本海側の玄界灘，響灘に面した海岸で記録されている。しかし，どの海岸でも四輪駆動車の砂浜への乗り入れとゴミ処理などの問題を抱えている。産卵場所を示す看板を設置したり車の乗り入れを禁止している所もあるが，逆にウミガメの産卵や孵化を見ようと海岸にやってくる見学者もいる。見学者が孵化した稚ガメの進路を妨げたりしないよう，適切な指導が必要である。

なお，分類名は環境庁（1993），千石（1979）その他に準拠した。また，それぞれの種の環境庁（2000）におけるカテゴリーを付記した。

（橋元浩一）

調査協力者：井上準一，岩崎富一，岩田知彦，太田博造，菊水研二，田代久義，洞 龍二郎，外山稜也，船木律子，船津廣見，吉田博一

絶滅危惧ⅠB類（福岡県）

アカウミガメ

カメ目 ウミガメ科 Cheloniidae

学名：*Caretta caretta* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：福岡県内で本種が確認されているのはほとんどが産卵のために上陸した記録からであり、その地域は響灘や玄界灘に面した砂浜に限られる。中でも比較的よく調査されているのは北九州市若松区の脇田海岸、岡垣町の三里松原、津屋崎町の恋の浦海岸である。ほかにも11の海岸から記録はあるが、正確な産卵数や孵化数などはほとんど記録されていない。これらの多くの地域で共通している最大の問題は四輪駆動車などでの浜辺への乗り入れ、およびそれに付随するゴミの問題である。すなわち、四輪駆動車の轍や放置されたゴミなどは孵化後に海中へ移動する稚ガメの進路妨害となる。また稚ガメの進路には光が関係しているため、夜間のヘッドライトなども進路方向を狂わせる要因にもなる。ほかに関門海峡や周防灘方面でも漂着記録はあるが、産卵の記録はない。

分類・形態：本属はアカウミガメ1種で構成される。甲長70～100cm。海洋生活に適したオール状の四肢をもつことで、ほかのカメ類と間違えることはない。
分布：太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から温帯域、および地中海に生息する。

生活史・生態・生息地：産卵期は5月から7月にかけてで、県内の産卵記録も6月が多い。産卵数は一度に100～150個ほどでピンポン球状をしている。雌は1シーズンに数回（最高6回）産卵を繰り返す。孵化するまでは50～70日ほどかかり、これは温度によって左右される。

法令などの指定状況：地域指定（静岡県榛原郡御前崎町、徳島県海部郡日和佐町）の国の天然記念物および阿南市椿町蒲生田（徳島県）、宮崎市から高鍋町まで（宮崎県）の県指定の天然記念物（橋元）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

タカチホヘビ

トカゲ目（有鱗目） ナミヘビ科 Colubridae

学名：*Achalinus spinalis* Peters, 1869

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：全国的な生息環境を見ても特に特徴のある環境でしか見られないものではないが、県内で記録されている地点は数カ所であり、個体数も多くは見つかっていない。しかも、移動性に乏しく、鱗の並びの構造から乾燥にも弱いため、森林伐採などの環境破壊により、今後の個体数の減少が考えられる。

分類・形態：全長30～60cmほどの小型のヘビ。眼は小さい。体色は紫がかった褐色で、正中線上に1本の黒い縦条が走るが、成長した雌は体色が黄色になることが多い。鱗もビーズ状で一般のヘビと異なり、鱗が敷石状に並び皮膚が裸出している。また、この鱗には虹状光沢もある。正中線上の1本の縦条と尾下板が対をなしていないことで本土産の他種とは容易に区別がつく。

分布：（県内）福岡町本木小越林道、矢部村矢部蚪道、篠栗町（九州大学粕屋地方演習林）、英彦山、北九州市八幡西区奥畑および小倉北区山田緑地から記録されている程度であるが、よく調査すればほかの地域からでも発見される可能性は高い。

（県外）本州、四国、九州とその沿岸島

（国外）中国中部、東部

生活史・生態・生息地：普通は低山地や山地の林内や林道周辺、特に「がれ場」などで見られる。夜行性で昼間は朽ち木や石の下などに潜んでいて、餌は知られている限りではミミズ類。繁殖については不明な所が多いが7月下旬～8月にかけて3～13個の卵を産むことが知られている。

（橋元）

準絶滅危惧 (福岡県)

ニホンイシガメ

カメ目 ヌマガメ科 Emydidae

学名: *Mauremys japonica* (Temminck & Schlegel, 1833)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 日本の固有種で、古くからよく知られたカメであり、クサガメよりきれいな流れにすむことが多いため、護岸工事などにより水質の悪化がすすむと本来の生息地が脅かされるおそれがある。また商業目的のためのペットとしての採集も個体数の減少につながっている。

分類・形態: よく混同されるクサガメとは本種の方が背甲の後縁部が鋸歯状に切れ込み、中央に1本の不連続なうねがあること、背甲は褐色で黄土色がかったことが多く、腹甲は一様に黒色を呈しており、またクサガメの雌では側頭部から頸部にかけて黄色い縦条があることでも区別できる。

分布: (県内) 今回の調査では太宰府市と筑紫野市の2カ所で確認されたにすぎない。いずれにせよ過去の記録をみてもクサガメよりは個体数があまり多くないカメである。

(県外) 本州、四国、九州。離島では佐渡、隠岐、見島、壱岐、対馬、五島列島など

生活史・生態・生息地: 河川の上・中流域、山間部の池沼および水田で見られる。時にクサガメと同所的に見られることもあるが、本種の方が遊泳力が高く、雄で3℃、雌で5℃以上の水温で活動できるため、より流れの速い場所で生活できる。春と秋に水中で交尾し、5月下旬～8月上旬に河川敷内の砂地などに1～12卵を産み、これを年に1～2回繰り返す。孵化した幼体はもともとは「銭亀」と呼ばれていたが、近年この名でペットとして販売されているのは、ほとんどクサガメの子である。雑食性で実にさまざまな食物を摂食する。

法令などの指定状況: 地域指定 (山口県萩市見島) の国の天然記念物

(橋元)

準絶滅危惧 (福岡県)

ニホンスッポン

カメ目 スッポン科 Trionychidae

学名: *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann, 1835)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 今回の現地調査では全く確認ができなかった。また昨今のスッポン養殖の現状から国外産の養殖個体が逃亡して定着し、純粋な国内産の個体群との間に交雑が起こっている可能性がある。

分類・形態: 甲羅には角質化した鱗板がなく、表面がやわらかい皮膚で覆われ、爪の数が3本であること、また吻端の突出した特徴的な風貌からほかの日本産のカメと間違えることはない。甲長30cmほどの個体が多いがそれを上回る個体もいて、日本産の淡水性カメのうちでは大型である。

分布: (県内) 正確な分布データはほとんどない。

(県外) 本州、四国、九州、壱岐、徳之島、沖縄本島、石垣島、西表島、与那国島 (一部は移入)

(国外) シベリア東南部、モンゴル、朝鮮半島、中国、台湾、海南島、ベトナム北部、ハワイ諸島

生活史・生態・生息地: 底が砂泥質の河川、比較的大きな湖沼、流れの緩やかな水路などに生息する。昼行性でよく砂泥の中に潜り、吻部と眼を出している。日光浴も好きだが驚くとすぐに水の中に逃げ込む。野外では貝類、甲殻類、水生昆虫、両生類などの動物質を主に摂食しているが、飼育下では植物質も食べる。4～6月に交尾し、5～8月頃に10～40個前後のほぼ球形をした卵を産む。養殖技術の向上に伴い飼育下での習性は割と調べられているが、野外での習性に関する知見は非常に乏しい。

(橋元)

準絶滅危惧 (福岡県)

ジムグリ

トカゲ目 (有鱗目) ナミヘビ科 Colubridae

学名: *Elaphe conspicillata* (Boie, 1826)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 以前は平地や山地でも見られていたが、森林伐採や造成工事などにより、特に平地で個体数が減っている。

分類・形態: 胴の断面が円筒形で、上顎が下顎に覆いかぶさるようになるなど地中生活に適している。背面は黄褐色から褐色を呈し、頭部背面に3本の横条が走る。腹面の市松模様も本種のよい特徴。なお成蛇と幼蛇では色彩が異なり、県内で見られる幼蛇では背面が鮮やかな赤褐色で、明瞭な黒斑が目立つが、斑紋には変異が多い。特に東日本や北海道ではアカジムグリというヘビが知られているが、これは現在では本種の無斑紋型と考えられている。日本固有種。

分布: (県内) 低山地から山地にかけて見つかることが多い。

(県外) 北海道, 本州, 四国, 九州。離島では国後島, 隠岐, 壱岐, 五島列島, 伊豆大島, 大隅諸島など

生活史・生態・生息地: 全長80~110cmほどの中型種。森林や耕地などに生息し、よく地中に潜る。あまり暑い時期に活動するのを好まないようで、真夏に発見することは少ないが、春と秋には割とよく見つかる。したがって、夕方に活動しているのを見ることが多いが、特に夜行性種ではない。知られている限りハタネズミやヒミズなどの哺乳類を専門に摂食する。これらに巻きついて窒息死させてから呑むため、巻く力は強い。性質は温和。5~6月に交尾し、7~8月に4卵前後の卵を産む。

(橋元)

準絶滅危惧 (福岡県)

シロマダラ

トカゲ目 (有鱗目) ナミヘビ科 Colubridae

学名: *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 本種は夜行性で、また個体数もそう多くないと考えられるため県内での記録は少なく、断片的なものにとどまる。

分類・形態: 背面の基色は灰色から褐色で、胴に40個前後、尾に15個ほどの明瞭な黒い横斑があり、この横斑は特に頸の部分にある、つまり1番前の斑紋の面積が広く、尾にいくにつれて細くなる傾向にある。腹面は白色で、前部を除いて黒褐色の小点がある。頭部も黒っぽい。この斑紋のため、時にニホンマムシやヤマカガシ、アオダイショウの幼蛇と間違えられることもある。しかし、ヤマカガシやアオダイショウ幼蛇と異なり瞳孔は縦に楕円形であるため区別できる。体鱗列数も胴の中央部で17列と少ない。成長に伴う色彩の変化は少なく、幼蛇では白と黒い斑紋のコントラストが強いことと、後頭部に白い部

分が広がっていることぐらいである。日本固有種。
分布: (県内) 低山地や山地の特に山すそで断片的な記録がある。

(県外) 北海道の一部, 本州, 四国, 九州。離島では奥尻島, 佐渡島, 隠岐, 壱岐, 五島列島, 男女群島の女島, 屋久島, 種子島, 硫黄島, 伊豆大島など
生活史・生態・生息地: 墓地や人家付近でも見られる。基本的には夜行性で、昼間は地表の構造物のすき間や石の下などに隠れている。夜間に人家付近でも活動している関係で車に轢かれた路上死体を見ることが多い。餌は知られている限り主に爬虫類で、トカゲ類や小型のヘビ類を摂食し、本調査中にもヒバカリを摂食していた例がある。夏に1~9卵を産む。

(橋元)

(文献)

- Conant, R., 1975. A Field Guide to Reptiles and Amphibians of Eastern and Central North America. 2nd. ed. 429 pp. Houghton Mifflin, Boston.
- 橋元浩一, 1997. アカウミガメ. 動物あ・ら・かると34. ふるさとの歴史と自然, 265: 8-10
- 橋元浩一, 1998. タカチホヘビ. 動物あ・ら・かると39. ふるさとの歴史と自然, 270: 8-10
- 日高敏隆 (監修), 1996. 日本動物大百科第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類. 189 pp. 平凡社, 東京.
- 環境庁 (編), 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 (爬虫類・両生類). 120 pp. 自然環境研究センター, 東京.
- 中村健児・上野俊一, 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 214 pp. 保育社, 大阪.
- Pritchard, P. C. H., 1979. Encyclopedia of Turtles. 895 pp. T. F. H. Neptune, New Jersey.
- 千石正一 (編), 1979. 原色両生・爬虫類. 206 pp. 家の光協会, 東京.